

平成21年 5月28日現在

研究種目：基盤研究（C）（一般）

研究期間：2005～2007

課題番号：17530258

研究課題名（和文） 「水利共同体」からみた現代中国農村における国家と地域社会

研究課題名（英文） The State and Community in Modern Rural China in Terms of Water Rights

研究代表者 内山 雅生（UCHIYAMA MASAO）

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：30151905

研究成果の概要：

現代中国における水利灌漑システムの実態と社会的役割を、関係者へのインタビューを踏まえて、農村社会の伝統的慣行との関連から、明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,400,000	0	1,400,000
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	150,000	3,250,000

研究分野：中国近現代史

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：水利灌漑、水利共同体、農業の集団化、モラル・エコノミー

1. 研究開始当初の背景

現代中国では、農民辛苦・農村の窮乏・農業の危機という「三農問題」の解決が緊急課題である。まして最近の黄河では「断流」と呼ばれる、下流まで水が流れてこない現象が住民を悩ませている。ちなみに中国の歴代王朝は、体制維持のために、水利灌漑に取組み

ざるを得なかった。従って中国共産党による国内統一後も実情に変化はない。

2. 研究の目的

本研究は、鄧小平体制下で「改革・開放」政策を実施し、WTO加盟に象徴されるように、世界経済と直結し、文字通りグローバル化し

た世界の一員としての役割を果たすことが求められている現代中国農村社会において、「水利共同体」をキーワードとして、水利灌漑システムの実態から国家権力と地域社会との関係を明らかにするものである。

3. 研究の方法

本研究の方法は、日本および中国に現存する治水・灌漑を含む水利に関する文献資料の収集と、戦前期の農村調査および近年中国で実施された農村調査の成果の分析に区分される。農村調査に関しては、従来の先行研究との関連から、黄河下流域の山東省・河北省、そして中流域に属する山西省を事例として検討対象とする。

4. 研究成果

(1) 3年間の研究期間全般を通して、現代中国における水利灌漑システムに関する先行研究を、愛知県立大学・東洋文庫・滋賀大学等で収集した。

(2) 河北省・山東省・山西省の地方志から、水利灌漑に関する資料を収集し、そこから黄河下流域での水利政策を、国家レベルでの水利事業と、地方レベルでの水利政策に分類し、相互比較から、文献資料に描かれた「水利共同体」の実像を解明した。

(3) 戦前期の日本側調査機関による華北農村調査の成果の一つが、『中国農村慣行調査』である。その中でも、水利灌漑システムの研究対象地域とされた山東省平原県、天津市静海県、および河北省邢台市を研究対象地域とした。

また戦前期の満鉄等の調査資料から、山西省臨汾市、山西省太原市近郊農村、さらに山西省の太行山地区に属し、霍州市と洪洞県境の山間部農村であるの「四社五村」も研究対象地域とした。

そこでは村幹部のみならず、複数の水利関係者にもインタビューを試み、改革開放政策の下でも、従来からの伝統的結合論理としての宗教的結合と地縁的結合を重要な要因となっていること、さらに地域住民にとっても、その重要性が認識されていることが判明した。

以下、都市遠郊農村と、都市近郊農村における水利を中心に、本研究が明らかにしたことをまとめてみよう。

(4) まず、都市遠郊農村の水利について研究代表者は、山西大学や山西師範大学の協力を得て、2006年10月、2007年8月、07年12月の3回にわたって、「四社五村」のうちの橋西村と義旺村で村幹部から、過去の水利関係の実情と現在の状況に関する説明を受け、さらに近隣地域との水の配分を約し「水冊（水利のルールを記した冊子）」を閲覧した。そこで以下に上記の調査で得た橋西村と

義旺村を中心に、都市部から離れた遠郊農村での水利の実情を紹介しよう。

(5) 山西省の各地では明清以来の伝統的慣行により、民間の自治組織が水利組織を形成していた。この自治組織は「社」と呼ばれ、水脈にそって複数の村が水の利用の為に作った組織であった。従って「社」とは自治制を持った「水利共同体」である村落連合とも言える。しかし、中華人民共和国成立後、多くの民間の水利組織は、用水の確保の厳しさから、その運営を国家管理に委ねた。

(6) そのような状況の中で、山西省中部の山岳地帯に位置する霍州市（中華民国時代は霍県と呼ばれていた）と洪洞県の境界にまたがる地域には、明清時代の「水冊」に依拠した村落連合とも言えるべき「四社五村」が存在していた。「四社五村」とは、霍県と洪洞県にまたがる四つの社と五つ目の村の総称であった。これらの地域では、飲料水も含めて生活用水を確保するのがやっとなり、灌漑にまわす水の供給は不可能に近かった。4つの「社」は、複数の村から階層的に構成されていた。例えば、第1社の李荘社の下には、橋東村と橋西村があり、橋東村の下には、南川草窪村が、橋西村の下には、北川草窪村が位置していた。同様に、第2社の李荘社、第3社の義旺社、第4社の杏溝社と続く。そして5番目に第5村の孔潤村が位置する。

(7) 2007年12月に実施した霍州市水利局幹部エンジニア安五達へのインタビューでは次のような事実が紹介された。四社五村では水源の水を利用するルールをめぐって、頻繁にトラブルが発生した。四社五村の水利は全て飲用水となり、灌漑用にまわす余裕はなかった。そこで、灌漑用には、山西省における大河である汾河からの水に頼らざるを得なかった。汾河からここ霍州市内までは、30 km 余りも離れていた。汾河には9つの支流があった。その一つから電気モーターを利用して汾河の水を汲み上げて、霍州市や洪洞県を灌漑する2か所の灌漑区が作られ、約4万畝の水田が灌漑されるようになった。

(8) 霍州市が所属する七里峪灌区では、2002年に水道管が所属する各村までつながり、村の飲用水問題が解決した。義旺村では、2003年に井戸を掘り、水道管で村まで水を引き、貯水池を作った。以前の貯水池は、石で作られており、その貯水量は400立方メートルだったが、コンクリートで新たに作られた貯水池の貯水量は、200立方メートルだった。その水は主に劉家庄等に提供された。これらの工事は「義旺工程」と呼ばれ、その経費140万元のうち、国家が55万元、「四社五村」が71万元、霍州市と洪洞県の地方政府が残りを出した。四社五村は、霍州市洪洞県という二つの行政地域にまたがって存在しているので、現在でも地方政府は、水利問題に介入しにく

い。

(9) 山西省には水利工事に関する管理条例が定められているが、地方政府は伝統的な水利慣行を尊重し、四社五村の中心的な村で、最も大きな社の中心である義旺村に調整を任せていた。最近では、洪洞県側の村でも井戸を掘って水利問題を解決したため、1980年代以降、村同士での水のトラブルは少なくなった。現在、義旺村には深さ200メートルの井戸がある。洪洞県側には、深さ170メートルの井戸がある。

(10) 山西大学中国社会史研究センターが保有する「集団化時代の農村基礎資料」については、既にアメリカ在住の中国人研究者である黄宗智(Philip C.C.Huang)が編集する『中国郷村研究(*Rural China: An International Journal of History and Social Science*)』第5輯に、山西大学中国社会史研究センターの責任者でもある山西大学副校長の行龍(Xing long)が概述している。

行龍は、『区域社会史比較研究 (*The Comparative Study of Regional History*)』などの編集も手がけており、文字通り山西大学を中心に、中国の社会史研究をリードしている。従ってセンターの保管する資料の多くは、人民公社時代の農村社会の実情を細やかに伝えてくれる貴重な一次史料である。

これら一次史料の存在は、中国における社会史研究の発展を裏付けるものであるといっても過言ではない。

(11) さらにセンターには、水利関係の資料も多く保管されている。

その一部が、以下に紹介する太原市近郊の晋祠鎮赤橋村である。

晋祠に隣接する赤橋村については、政協晋源区委員会・太原晋祠博物館編『古村赤橋』(山西人民出版社、2005年)が出版されている。2007年12月、私は山西大学中国社会史研究センターのスタッフと共に、赤橋村を訪問した。

赤橋村の元書記の王春生等の説明によれば、中華民国時代までは、晋祠の泉の水を利用した水稻栽培が盛んであったという。収穫した米は太原まで運んで行き、米1斤に対して高粱3斤と交換したという。

しかし中華人民共和国成立後は、晋祠の水も減少してきた。多量の水を必要とする田植えの時は、最初に水源に近い赤橋村が20日間だけ水を使用し、その後その他の村が使用したという。2年前から晋祠の水が減少してきたので、水田も減り、現在ではほとんど水稻作は行われていないという。

(12) 晋祠の中には、泉から湧き出る水を二方向に分ける分水所がある。泉から湧き出た水は、上段のプールに溜められ、7対3に分けられる。灯籠のような形をした石の置物を基点として右と左に、7個の穴と3個の穴に

分けられている。7対3の理由は現在ではまだわからないが、分水された水は、赤橋村では、智伯渠と名付けられた水路に入り、村を縦断している。

中国の農村の多くでは、引水した水道管は地中に埋められている。しかし分水所のような要所では、誰が見ても明らかな比率で分割されて流れていく様子が地表で窺える。

このような分水所は、都市部に近い水源地の多くに設置されている。そして義旺村と同じように、水源の近くには、必ず水神である龍王を祭る龍王廟などの宗教施設が現存している。晋祠は晋の始祖を祀るところであるが、湧き出る泉の神も、あえて龍王ではなく、晋の始祖に置き換えられている。

(13) 2006年8月に調査した、山西省中部の介休市の洪山鎮にある源神廟では、神像が安置されている廟の鍵は、堂守の農民ではなく、廟の真向かいにある介休市洪山水利管理所の事務部門である弁公室の主任が保管していた。

大学院を出てきて間もないという主任の説明では、霍州市水利局幹部エンジニアの説明と同様に、給水地域のトラブルを避けるために、旧来からの伝統的な水利慣行を遵守しているという。

晋祠を中心とする赤橋村の近隣でも、旧来からの伝統的な水利慣行が守られている。

研究代表者は現在、山西大学のスタッフの協力を得て、赤橋村を中心として「集団化時代の農村基礎資料」を分析している。

分析作業はまだ途中だが、次のようなことが仮説として提起できる。

(14) 山西省の農村の多くは、「改革・開放」経済体制以後、経済のグローバル化の中で大きく変貌している。

そのような激しい変動の中で、多くの農村は、西ヨーロッパや日本の社会とは違った形態を取りながら、地域の伝統的慣行を保持し、地域住民の共同体的結合によって地域の伝統的慣行を保持しその生活と生存を維持している。

(15) 最後に本研究で明らかになったことを改めてまとめておこう。

その第一は、日本の中国研究では、「中国社会における共同体」の存否をめぐる、さまざまな論争があり、いまだその結論は出ていない。その原因の一つに、「日本社会における共同体」の概念を基軸として中国社会を比較したため、「中国社会における共同体」に関する独自性への理解が共通認識とされないまま、論者によって共同体そのものに対する概念規定も異なったまま、論争が展開したことがあげられる。

第二に、「中国社会における共同体」には、ヨーロッパや日本の共同体が、しばしば農業生産活動との関連で議論されたのに対して、

皇帝による王朝支配と地域社会との関係、つまり国家と社会の関係を中心に検討されてきたという歴史的経過が存在する。このような傾向は、現代中国に関する分析にも影響を与えている。

第三に、以上のような議論にもかかわらず、過去の中国実態調査研究には、共同体の実像を検討する貴重な史料が多く残されており、またその一部は未活用のままにされている。特に、日中戦争期に実施された満鉄の調査資料、中でも『中国農村慣行調査』には、農民の目線から語られた、中国農村社会および農民の実像が記されている。

第四に、1940年代の農村調査である『中国農村慣行調査』を基礎資料として、中国農村を分析すると、会首と呼ばれた「村内の有力者」を中心に、村内の防衛および治安維持に関する共同慣行が維持されていること、さらに搭套と呼ばれる畜力を中心とする労働力交換および共同作業が、個別農家間を中心として継続され、中華人民共和国になって組織化された「農業の集団化」の基礎組織としての役割を果たしたことが理解できる。

第五に、50年後の1990年に私も参加して実施した再調査を、50年前の満鉄等の調査資料と比較検討すると、上記のさまざまな社会関係や農業慣行は、社会主義建設を推し進めた現代中国に引き継がれていったことが理解される。

このことから、従来強調されてきた中国共産党による「上からの集団化の強制」という認識が、現実の農村社会に存在した社会関係から考察すると、一面的な理解であることが明らかになる。

第六に、近年研究代表者が実施している水利を中心とした内陸部の農村に関する調査から、次のようなことが断定できる。つまり、地域社会の中で連綿と持続されて来た伝統的慣行が、地域社会間および国家との関係において、重要な調整力として機能していること、さらに共産党を中心とする行政機構も、地域社会の安定を維持する上で、その共同性に依拠した郷村統治を実施していることである。

以上の論点を踏まえて、中国農村における共同体の具体的な実像を、農村社会の深部の構造に関する検討と共に探求すれば、人類にとっての共同体の意味もより鮮明となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)

①内山雅生、弭麗峰「現代中国農村における水利灌漑について」、『宇都宮大学国際学部研

究論集』22号、2006年、1-20頁。

[学会発表] (計 0件)

[図書] (計 2件)

①内山雅生 (共著)、『地域統合と人的移動—ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望』、御茶の水書房、2006年、1-329頁。

②内山雅生 (共著)、『東アジア共生の歴史的基礎—日本・中国・南北コリアの対話』御茶の水書房、2007年、1-342頁。

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

○取得状況 (計 0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内山 雅生 (UCHIYAMA MASAO)

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：30151905

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者